

中国の文化と日本の文化

崔 春 基

目 次

- I. はじめに
- II. 「具体的な指向」と「抽象的な指向」
- III. 「具体的な指向」と「抽象的な指向」による文化現象
- IV. 教育から見た中国の文化と日本の文化
- V. おわりに

I. はじめに

一言で「文化」といってもそれを使用する人によっては、意味の範囲が大きく違ったりする。小にしては、夫婦間の習慣の違いによる喧嘩を、異「文化」の衝突と見たり、大にしては、地球上の宗教区域を、同種の文化地域と見なしたりするようである。そこで本論では「文化」を、一民族の共通の価値観を反映した、物心両面にわたる活動の様式、また、それによって創り出されたものとするが、このような文化の発生、発展、変化の要因としては、その民族の言語、その民族がおかれている自然環境等の他に、その民族の歴史、教育、宗教、芸術活動などを挙げることができるだろう。

ところが、一民族の共通の価値観を反映した物心両面にわたる活動の様式、また、それによって創り出されたもの、つまり、一つの民族全体の文化の発生、発展、変化の要因としては、日本の場合、一つの国全体（民族全体）が一つの言語を共通語として使用しており、国全体が同じパターン

を行なっているが、もし宗教も伝授を中心に考えた場合、一種の教育とも見ることが出来るので、言語と自然環境、それに宗教を含めた教育等が文化考察の主要な要素となりうるだろう。

他方、中国の文化の考察においても、考察の対象を漢民族の文化だけに限定をすると、日本の場合と同じく、一つの言語が共通語として使用されており、教育も歴史上の伝授と実行を中心とした儒教（宗教ではないが）を対象にした場合、民族全体が同じパターンの教育を受けて来た

と見ることが出来る。従って中国の文化を取り上げる場合は、中国語（漢語）と中国の儒教が考察の主要な対象となり、日本の文化を取り上げる場合は、日本語と日本の教育が主要な考察の対象となり得るだろう。

そこで本論では言語だけに限定せずに、民族的な教育、特に、中国の場合は、文字も知らない一般の庶民でも長い歴史に渡ってその実行を強要されてきた儒教というものが有って、支配者が変わっても国家体制で延々とその教育を続け、特に家庭を単位にその実行を強要されてきたので、ある意味では現在の日本の国民的な義務教育よりももっと実行効果が現れたものと見ることが出来るが、そのようなものも考察の対象にしな

くつか取り上げて、それらと日本の文化との相関関係を見ていきながら、考察することにする。

II. 「具体的な指向」と「抽象的な指向」

中国の文化と日本の文化の大きな一つの違いに、「具体的な指向」と「抽象的な指向」が挙げられるだろう。ここでいう「具体的な指向」と「抽象的な指向」の違いというのは、言語における「具体的な指向」と「抽象的な指向」の違いと、その違いから来る人間の思考上の違い、延いては、人間の思考から来る行動までの違いを指す。そこで、ここでは先ず、中国語における「具体的な指向」と、日本語における「抽象的な指向」というものから見ていくことにする。

さて、中国語には、文字を知らない人を含むすべての中国人（すべての漢民族）が広く使っている特殊な表現形式が有るが、日本語にはそのような表現形式は見当たらない。その特殊な表現形式というのは、日本語にはない「歇后语」という語（実は語より大きい単位である場合が多い）を使って、「成语」という日本語の慣用熟語のような語を推測させる表現である。

例えば、「泥菩萨过河」（泥で作った菩薩が河を渡る）と言って、「自身难保」（自分自身の身の安全を守るのに精一杯である）という意味の「成语」を推察させる「歇后语」のことを指す。特に次のような場合：「外甥点灯笼」（甥が提灯を照らす）と言って「照旧（舅）」（相変わらず、或いは、依然として）と言う語（発音は「叔父を照らす」という語に当たる）を推察させる表現形式である。

ところが、この場合の「歇后语」は、日本語の洒落に少し似ているように見えるが、実は中国語の「歇后语」の場合は、

「外甥点灯笼」「照旧」。（「甥が提灯を照ら

す」ように「相変わらず」だよ）

ともよく言うので、日本語の洒落と完全に一致するとは言えないようである。このように見てくると、「歇后语」というのは日本のなぞなぞのようにも見えるが、実は日本のなぞなぞとも違う。というのは、中国にもなぞなぞがあって、物を当てるとか、道具類を当てるとかするが、これが日本のなぞなぞに当たるもので、その名前も「谜语」と言って、「歇后语」とは違う。もちろん、中国語と日本語とでは、同じなぞなぞというものでも、それが完全に一致するとは限らず、何処か違うところがある。例えば、中国のなぞなぞには、文字を当てることが多いが、日本のなぞなぞはそのようなものではない。つまり中国語と日本語とでは、同じ名前の物でも、それに包含される内容物が違ったりする。しかし、なぞなぞの場合、表現形式としては日本語に直すと「～はなあんだ?」、「～は何の字だ?」のような形になる。この形からでも分かるように、中国語と日本語とでは、名前は同じ物でも内容物まで同じ物になるとは限らない。従って、日本語には対応語もない「歇后语」を、日本語の洒落や、なぞなぞと同じ物扱いをすることはできない。

特に、中国語の「歇后语」の場合は、その使い方に特徴があって、「歇后语」だけを単独に使う場合もあるにはあるが、普通は、例えば、

- ① 他擗面杖吹火一窍不通〔彼は麵棒で火を吹くようにぜんぜん通じない（彼は全くの素人だ）〕。

のように使う場合が多い。つまり、

「～のように～」

のような形で、翻訳できる形で使うのが「歇后语」の一つの特徴である。

ここの「～ように～」の前の「～」と、後

の「～」は、それぞれ、具体的な側面と、抽象的な側面に立つのが一つの特徴である。このため①は、一つの抽象的な事柄を、他の具体的な側面から捕らえた表現形式であると見ることが出来る。

中国人は、たとえ文字の知らない人でも、音声を聞くだけで、①のような表現は、何の事を言っているのかよく分かる。つまり中国人なら誰でも、①のような表現は、一つの事柄を二つの側面から捕らえた表現であり、しかも、一つの抽象的な事柄を、別の具体的な側面から捕らえたということがよく分かる。それに、中国語の「歇后语」というものは、語の数が日本語の洒落等より比べ物にならないほど多く、理論的には「成语」の数だけ「歇后语」があると言えるが、中国語の「成语」は、厚い厚い辞書が有るぐらいだから、「歇后语」も無限に有るといっても過言ではない。無限に有るからこそ、言語上の一つの「具体的な指向」として成り立つのである。

これで、中国人は、知識人であろうと、無知な農民であろうと、一つの抽象的な事柄を他の具体的な側面から捕らえるということが分かっていただけたと思う。中国人の思考の順序としては、先に既成語（成語、或いは他の語）が事柄の一つの側面として頭に浮かび、その後、それらの語が表わす事柄の具体的な側面が頭に浮かぶ。しかし、言語として表現する時は、先に、具体的な一面、つまり「歇后语」を言って、その後、「成语」或いは他の語を言う。つまり、「～ように～」という形で表現する。

以上、中国語は日本語と違って、広範囲に渡って「具体的な指向」が成立することと、中国人の思考過程と表現順序を見てきたが、中国語には「四字成語」だけに当たる「歇后语」ばかりではなく、理論的にはあらゆる語に対応する「歇后语」が存在すると見ることが出来る。実は、前述の「外甥点灯笼」も、四字成語に対応する「歇后语」ではない。そ

ればかりか、無知な農民が使う「歇后语」ほど「具体的な指向」が広範囲に渡り、その中には社会性を持たないものも有るが、時間が経つにつれて社会性を持つようになるものも、段々増える傾向にある。

例えば、

② 「光屁股推磨」「转圈丢脸」（裸で石臼を引くようにいたるところで恥をかく）。

③ 「雪地里烤火」「一头儿热」（雪の中で火に当たるように一方しか暑くない）片思いだという意味。

のようなものは、まだ社会化されていないかも知らないが、

④ 「和尚打伞」「无法无天」（坊さんが傘を差すように無法だ）。

のようなものはもう広く使われていると見てよいだろう。

以上のように広い範囲にわたって「具体的な指向」が成立する言語は、世界に例を見ない言語であるともいえるだろう。したがって、このような言語を使って思考する、中国人の思考法も世界では希なものであるといえよう。ある語（事柄）が頭に浮かぶと、必ずまたその語（事柄）の具体的な側面に当たる語（事柄）が別途に頭に浮かぶ。これはつまり、ある事（或いは物）が頭に浮かぶと、必ずそれと関連のある別の事（或いは物）が頭に浮かぶということであり、ある一つの事柄が有れば、必ずその事柄の具体的な側面が本能的に頭に浮かぶという思考法である。つまり、一が二に分かれるという思考法である。

仮にこのような思考法を二分法の思考法とすると、中国人の思考法は、知識人であろうと、無知な農民であろうと、皆二分法思考法の持ち主であるとみていい訳である。ここで言う二分法思考法とは、例えば、一つの西瓜

を二つに分けるような分け方をする二分法思考法ではなく、一つの西瓜が有れば、その西瓜をまるごと一つの側面と見なし、それから、頭の中でその西瓜に似たようなもう一つの丸いものを思い起こして、それをもう一つの側面と見なす分け方をする思考法である。つまり、一つの事柄を二つの側面から捕らえる二分法の思考法である。

では、この二分法の思考法は、従来の二極性の思考法とはどのように違うのか。

これについては、先ず従来の二極性の思考法というものからみていかなければならない。従来の二極性の思考法は、ここの二分法の思考法によって分けられた文、或いは、それらの結合体の「～のように～」と表現された文が、更に相対立した二つの文に分けられるが、この相対立した二つの文に分けられるとする思考法のことを二極性の思考法という。従って、ここの二分法の思考法は、段階的には、従来の二極性の思考法の前の段階のものと見ることができる。

従って、ここの二分法の思考法の行き着く所は、結局、二極性の思考法であるとすることができる。つまり、二極性の思考法は、二分法の思考法を内包しているとすることができる。言い換えると、二分法の思考法は、二極性の思考法に内包されるものと見ることができる。

このように、中国人の二分法の思考法は、二極性の思考法が形成される前の過程の物であるが、前の過程における具体的な指向などの性質は、二極性の思考法においても、引き継がれている。

それについては、森三樹三郎氏が引用した、内山完造という人の説を見たら、よく分かると思う。

「中国人はほうっておくと両辺倒になる民族である。つまり、何かすばらしいことを聞いたばあいに、なるほどと一応は感心するけれども、しかし人間のいうことであるから完全

であるはずはない。それは一面の真理であろうが、別の角度から見れば、また違った見方があるかもしれぬ、ということを実感的に感じるのである。それはインテリばかりではなくて、無知な農民に至るまで同じである。」

これは、内山完造という人が、中国に長く住みながら、中国人の行動を、細かく観察して得た結論である。ここに述べた中国人の行動は、中国人の二極性の思考法による行動であるが、ここに無知な農民の、言語の具体的な指向による二分法思考法が伺われる。というのは、中国人の二極性の行動の本質は具体性にあるからである。(崔 1999 『北星論集 36 (社)』参照)

では、中国の無知な農民の二極性の思考法はどのように形成されたのか。周知のように、人間は言語によって思考を行なう。もちろん、無知な農民も言語によって思考を行なう。ところが無知な農民が用いる言語は、「具体的な指向」を持つ言語である。つまりある事が頭に浮かぶ、(何かを耳にする)と、必ずその具体的な一面に当たる、別途の事柄が頭に浮かぶ。つまり一つが二つに分かれる二分法の思考をする、これが日常生活において常に行われる、その結果「二分法の思考法」が形成され、その後、二分法による言語表現が、更に相対立する二つの側面に分かれて、二極性の思考法が形成される。

このようにして「二極性の思考法」が、無知な農民の頭にも出来上がる。従って、無知な農民も本能的に口から言葉が出るように、本能的に一つの事柄の二つの側面を頭で捉え、このようにして捉えた二つの側面は、頭の中で行き来するし、更にはそれらと相対立する面にまで考えが及ぶようになる。

というのは、中国語は、文が成立する全範囲において、ある文があれば、その文と意味的に相反する文が存在して、それが話者の頭に浮かぶ(中国語の二極性が頭に浮かぶ)からである。このようにして、無知な農民でも

二極性の行動を取るようになる。つまり内山完造氏の言う「二辺倒」になるわけである。

さて、中国人の思考法を決定する中国語は、表現の形から見た場合、大きく三種類に分けることが出来る。その一つは前述の

「～ように～」

の形で翻訳できる表現である。この種の表現形は、事柄を一極に具体化するので、事柄を具体化していない時の一極と、具体化した後の一極を合わせて二極をなし、方向としては抽象から具体化の方向に向かうのが特徴的である。

二種類目の表現形は、

「～是不是～」

「～動不動～」

「～形不形～」

の三つの形からなるものであるが、これらのうちの前後の動詞や形容詞は、同じ動詞や同じ形容詞の対立を指すものである。そして、これらの共通性は、「事柄」をあい対立する二つの側面に分けるのが特徴的である。

三種類目の表現形としては、すべての動詞文や形容詞文などの文が、二極或いは二極以上に分かれるものである。それらを特定の表現形式で表示することは困難である。しかし、この三種類目の表現形も特徴があって、前の一番目の表現形と同じく、抽象から具体化の方向に向かうのが特徴的である。

例えば、日本語だったら「今学期は勉強するぞ」(这个学期我学习)というところを、「这个学期我学习」とは言わずに

这个学期我好好儿学习(今学期私は熱心に勉強する)。

と具体的に表現する。つまり「具体的な指向」が表れる。そして、このような具体的な表現は、二つ、或いは二つ以上あって、その中どれを選んでも意味的には大差がない。つまり一極から二極(或いは二極以上)に向かい、言語表現の指向としては、「具体的な指向」を示すのである。

中国人の思考法を決定する中国語を、思考法式による表現形として分類すると、以上の三種類に分類できるが、第一類と第三類の共通点は、思考対象の事柄が、二極、或いは二極以上に分かれる点と、分かれる方向としても、抽象から具体化に向かうことである。しかし、第二類は、「具体的な指向」が明確には表れないようである。ところが、この第二類は、中国語を過程的に見た場合、第一類と、第三類の後の段階の表現であると見ることが出来る。というのは、中国語は、原則的にはすべての文が、相対立する文に分かれるので、第一種類と第三種類はまだ第二種類まで到達していない文であると見ることが出来るからである。

以上で分かるように、中国語はどんな文であろうと、第二種類のように相対立する文に分かれるので、中国人は、誰であろうと二極性の思考法を持ち、その思考法による二極性の表現、つまり、二極性の行動を取るのが特技であると見ることが出来る。したがって、中国語を使って成長してきた中国人なら、誰でも本能的に、思考対象の事柄を、二つ(或いは二つ以上)の側面から考えるようになる。このため、内山完造氏が会った、無知な農民までが、「二辺倒」の行動を取ったと見ることが出来る。

さて、日本人の思考法と、行動を決定する、日本語の「抽象的な指向」のことであるが、これは、中国語とはまる反対の「指向」で、主に次のようなことを指す。

- (1) 動詞文の場合、例えば、「一生懸命勉強するぞ」、「しっかり勉強するぞ」というような個々の文が、「よーし勉強するぞ」というような一つの文に傾いてしまう「指向」、つまり、「一生懸命勉強するぞ」や「しっかり勉強するぞ」とは言わずに「よーし勉強するぞ」とだけ言えば済むような表現の指向のことを本論では「抽象的な指向」という。

(2) 形容詞文の場合、例えば、「本当に美味しい」、「大変美味しい」のような文が「美味しい」という一つの文に傾いてしまう表現上の指向のことを「抽象的な指向」というが、日本語は形容動詞文もこのような表現上の「指向」がある。

(3) 日本語は無限の具体的な文を一つの省略文で表現することが出来る。例えば、「これはまずくて食べられない」、「これは高すぎて買えない」のような文は「これはちょっと…」というだけで済むことが出来るので、このような表現も「抽象的な指向」と見ることが出来る。

中国語にも省略文はあるが、数からいっても日本語より断然少なく、同じ省略文でも、日本語の場合は、「これはちょっと…」のように抽象度の高い省略文になるが、中国語の場合は、「这台车有点…」(この車はちょっと…)とか、「这台电视有点…」(このテレビはちょっと…)などの様に、日本語より抽象度の極めて低い省略文になってしまう。

(4) 日本語は用言述語文を体言述語文にしてしまう傾向がある。例えば、「私はこれを買う」、「私はこれを食べる」などの文を「私はこれだ」という一つの文で言ってしまうこともあるが、実はこのような表現も「抽象的な指向」である。とうのは、「私はこれだ」という文は、「私はこれを買う」、「私はこれを食べる」、「私はこれに決めた」のような文を全部内包してしまう文であるからである。このように、多くの具体的な文を代表し得る文は、個々の具体的な文にとっては、抽象的な立場に立つので、「抽象的な指向」と見ることが出来る。

このように用言述語文を体言述語文にする現象は、日本語特有の現象で、言うまでもなく、中国語にはない言語現象であるが、これは多分世界にも例を見ない言語現象ではないかと思う。

以上、日本語の「抽象的な指向」と、それらの例を見てきたが、それらの例の共通の特徴から分かることは、日本語は、中国語だったら具体的な表現をするところを、抽象的な表現をしてしまう点である。そして、このような言語を使用する日本人は、煩雑で具体的な個々を、一々細かく表現する思考型ではなく、抽象的な表現を好む、つまり、抽象的な思考をする国民であることが見て取れる。

つまり、日本人は、例えば、「黒い犬」、「白い犬」と細かく分けて言うより、「犬」とだけ言えば、一発で「黒い犬」も「白い犬」も全部包含できるという一極的な思考法、つまり、抽象的な思考法を持つ国民であることがよく分かる。

日本人はこのような思考法を持っているので、行動的にもわざわざ、「黒い犬」、「白い犬」のような個々の行動を取らずに、「犬」という一極性の行動を取る。つまり、日本人は本能的に、「一辺倒」(内山完造氏の用語)になる。

中国人は「あなた今日いく? いかない?」(你今天去不去?)のように、頭には、両極が浮かぶのに、日本人は「あなた今日いく?」のように、頭には一極しか浮かばない。つまり、内山完造氏の言葉を借りていうと、中国人は、「二辺倒」の民族であるのに、日本人は「一辺倒」の民族である。

以上見てきたように、日本人は日本語を止めない限り、好もうと好まざると、「よーし今学期は一生懸命勉強するぞ」や「よーし今学期は熱心に勉強するぞ」という「行動」は面倒くさがり、「よーし今学期は勉強するぞ」という「行動」を本能的に取る。

現に、日本人は、裸の用言(修飾語の付か

ない単独の用言)をよく使いたがる。例えば、テレビの試食のシーンであるが、違った場所、違った時間に、違った人が、違った食品を試食しながら、皆、異口同音に、「美味しい」としか言わない。少し詳しく言う場合でも、先に「美味しい」と裸の用言を言った後、「これはこくがあって美味しい」と言ったりする。

「美味しい」、「大変美味しい」、「本当に美味しい」の発音行動は、抽象度の違った三種類の行動であるが、このうち日本人が一番好んで選ぶのは、裸の用言、つまり一番抽象度の高い行動の方である。これが日本語から来る行動で、筆者のいう一極性の行動である。

つまり、前述の例で言うと、日本人は、「黒い犬」とか、「白い犬」とかの個々の具体的な行動を取らずに、「犬」という一発の行動で、他の個々の具体的な行動を全部カバーしようとするような発想を持っている。このような発想はもう本能になっていて、この発想にしたがって行動をすると、知らず知らずの中に、一極性の行動を取ってしまう。

以上、日本語の「抽象的な指向」と、日本人の行動様式的一面を見てきたが、元々人間は、言葉によって物を考え、考えによって行動を取るので、日本人が日本語を止めない限り、「一極性の行動」は止められないと思う。

日本語が世界では類を見ない言語であるように、日本語から生まれる一極性の行動も、世界に類をみない行動であると、筆者は見ている。

ところが、今日本には、ことある毎に「一極性の行動」、俗に言う「横並び」を止めようと呼びかけている人がいるようだが、それは日本人に日本語を止めろというのと同じで、ほとんど不可能に近いことであると思う。

それより、日本人は、日本人にしかない長所である「一極性の行動」を有効に取っていくことを考えた方が良いのではないと思う。つまり、これまでの考えを180度に変えて、

庶民の「横並び」を良い方向に持っていくリーダーを早く養成すべきであると思った方が良いのではないと思う。日本の庶民を、めん鶏が孵してまもない雛に喩えると、日本の問題は、雛の問題ではなく、めん鶏の問題であることは明らかである。

雛は、めん鶏が行くところなら何処にでも付いて行く。したがって、雛が何処へ行くかはめん鶏次第である。だから、雛の行動を咎めるのは、筋違いであり、めん鶏さえしっかりしてくれば、雛の行動は心配する行動ではなく、日本の将来を一層明るくする行動ではないかと思う。

Ⅲ. 「具体的な指向」と「抽象的な指向」による文化現象

中国語の「具体的な指向」は、中国人の事物観察の思考法の源であるが、中国人は内心の世界を、具体的な事物に喩えて表現するのが特技である。例えば、中国語の「歇后语」

哑巴吃黄连，有苦难说（哑がオウレンを呑んだように辛いことがあっても言うに言えない）。

のようなものは、人間の言うに言えない内心の辛さを、非常にリアルに表現している。つまり人間の言うに言えない内心の辛さを「哑巴吃黄连」という非常に具体的な事実で喩えて表現している（中国人の認識の過程としては、先に「内心の辛さがあるそれが言うに言えない」という心の働きが発生し、その後、具体的な「哑巴吃黄连」という事実につながるが、表現としては、他人が理解しやすく具体的な事実を先に取り上げ、その後で内心に触れる）。中国人は、このように内心の世界を、現実の具体的なある事実で喩えて認識するのが文化的な特徴の一つである。中国人は、具体的な事物に託して内心の思いなどを表現するのも、他の民族より非常に上手であり、また勝れている。例えば、中国人はよく月に

託して故郷を偲び、一家団欒を期待したりする。また、中国人は、遠い異国の地でも、中秋名月に、月餅という丸いお月様の形をした菓子を食べながら月を眺め、家内円満を祈り、故郷を偲んだりするが、それが歴史上延々と続いている。

そればかりか、中国人の年中行事や、室内装飾品などからも、具体的な目に見える物に託して、内心の欲望やその他もろもろの心理活動を表現していることがよく分かる。例えば、中国人は、旧正月に、ドアに赤い紙に書いた「福」の字をさかさまに貼っておくが、それは、「福の到来」を願うものである。中国の漢字「到」と「倒」は、同音異義語であるが、それをうまく利用したものである。中国語においては、「到」は「到来」を意味し、「倒」は「逆さま」を意味する。そこで「福」を逆さまに貼るということは、「福」が「到来」することを祈るということになるわけである。これは、少し遠回りの遠慮がちな願いであるが、家具の丸い食卓などは、直接家内円満を願ったものである。

このように、中国人は、具体的なものに人間の心的なもの、つまり抽象的なものを託するのが一種の文化であるが、心的な部分を、具体的なものに託すあまり、天国を人間社会（中国の過去の人間社会）と全く同じ模型の物と想像するようになった。これは中国文化の典型的な一面を反映したものであると言える。実はこれは道教の文化であるとも見てもよいが、中国の道教は、実にうまく中国人の事物観察の特徴を反映していると言えることが出来る。

さて、中国人の心内にある天国には、先ず地上の中国人社会にある皇帝に当たる「玉皇大帝」があり、その下には地上の大臣に当たる官職があって、そのまた下にも地上の官職に当たる官職があって、ほぼ地上と同じぐらいの仕組みの具体的なものである。かの有名な孫悟空が呼ばれて天に昇った時は、馬を管

理する位の低い官職が与えられて、天国をおお暴れに暴れ回ったことは、日本人も良く知っていることである。その孫悟空が楊二郎と戦う時使った七十二種の変身術も有名だが、結局はその変身術を楊二郎に見破られてしまって、戦いには負けたが、今尚中国では「孫悟空七十二変」という語彙を使っている。

ところで、中国人の心内の天国と、具体的な人間社会との間には、人間社会の最高位の皇帝が、玉皇大帝から命令されるという形につながっているが、中国人がよく「天第一」、「人第二」と繋いで使う言葉があるように、天が上位、人間社会が下位である。しかし、天は、いつも上から人間社会をよく観察していて、誰かが悪いことをすると処罰することになっている。また、天には無数の神がいて、それらの神を地上の各家庭にも派遣して、地上の人間を一人も漏れなく管理下において、思うがままに支配をするということにもなっている。かの有名な孫悟空さえ、天の言うがままになるぐらいだから、他の人は、言うまでもなく自分のすべてを、天命に任す。

もちろん、天国も歴史の流れにつれて少しずつ変わって、支配をゆるめたり、支配層を変えたりした。例えば、仏教が中国に入ってから、天国の支配者に仏教支配層が加わることもあり、実際、三蔵法師や孫悟空たちのお経取りを、コントロールしたのは、観音菩薩であるが、中国の庶民の心内には観音菩薩が、普陀落にいるのではなく、天に居ながら、その指揮を執ったと思っている。

それから、中国人の内心の天国は、中国人の庶民を家族単位に監視下に置き、神様を長住させて、監視をするようにしたが、その監視の内容は、目に見える具体的な行動の部分と、目には見えない人間の心の部分の、二つの部分に分けられる。このように、天国は中国人を、行動は言うに及ばず、目には見えない心まで監視管理をしたが、ここまでされると、かの暴れん坊の孫悟空までが天には逆ら

えず従順になり、一般の庶民は皆、大人しくて、支配者に従順で、温厚で、現状に満足し、善良かつ勤勉になり、一言で言えば、支配者が支配しやすい人間になってしまったのである。

以上、中国語の「具体的な指向」から、中国人は、心的な部分を具体的な事物に託して表現する発想が出来たこと、心的な部分をあまりにも客体に託すあまり、心的な天国を、人間社会に託して扱ったこと、その結果かえって天国に支配されて、支配者の思うがままの人間になってしまったことを考察した。そこで、次ぎは天と中国人のつながりの、具体的な一つの例を見てみることにする。

さて、天は中国人を、家庭単位に管理し、支配してきたと言ったが、具体的には、各家庭に「灶王爷」（かまどの神様）を派遣して、年中各家庭に居留させて、その家庭の人の行動はいうに及ばず、その家庭の一人一人を心の動きまで、一々細かく観察して、毎日メモを取って、年に一回の師走の二十三日には、天国に帰って、玉皇大帝に報告することになっている。このため、各家庭の人は「灶王爷」が発するに先立って、飴などの甘いものと、赤い紙に包んだお金を神棚に供えて、祈りを捧げて天国に送るが、飴など甘いものを供えるのは、「灶王爷」が甘いものを食べて口が甘くなって、玉皇大帝に報告をする時、きついことを言わずに、甘い言葉で報告するようにという切実な願いを込めてのことであり、赤い紙にお金を包んで供えるのは、これは、賄賂で、「灶王爷」が収賄をすると、玉皇大帝に悪いことが報告できないだろうという思惑からである。各家庭の願いはこれだけに留まらず、かまどの神様の帰りに（帰りは一月四日である）、天からの良い知らせ、つまり、「福」を持ってきてくれるようにとの期待も掛けている。

このように見てくると、中国人は、天国を人間社会と同じぐらいに、具体的に捕らえて

いることがよく分かる。そして、中国人の天国観の一つの副産物として、中国人の社会には昔から贈賄、収賄などの、今で言う腐敗現象が存在していたことも分かっていたかと思ふ。

以上は、中国人と天国とのつながりの一例であるが、この例からでも、中国人は、抽象的な事柄を、具体的な事柄に託して表現しようとする、中国人独特の発想を持っていることがよく分かっていたかと思ふ。

一方、日本語の「抽象的な指向」からは、日本人の一極性の思考法が生まれるが、この思考法による行動の特徴というのは、一極性の行動、つまり俗にいう「横並び」である。筆者の言う日本人の一極性の行動は、適切な比喩ではないが、前述の雛のような行動で、多くの国の人が学びたくても学び取る事の出来ない行動である。ところが、アジアの一部の国は、日本人の一極性の行動を、無気味に思っているようである。そして、日本人の一極性の行動は、日本人の情緒から来るものであると思っているようである。確かに日本人の「横並び」というものは、情緒的な一面もあるような気もする。それにまた、そのような情緒は日本の風土が助長させている感じさえする。

しかし、もし一極性の行動が、情緒的なものとすれば、必然性を欠く事になり、コントロールも可能となって、今の日本人が「横並び」で頭を痛めなくても済むことになる。ところが、今の日本人は「横並び」で頭を痛めているし、ことある毎に「横並び」の悪口を言っているが、本当に100パーセント情緒的なものであれば、ある程度のコントロールが聞かぬので、コントロールすれば「横並び」の心配をしなくても済むと思ふ。

そこで筆者は、日本人の一極性の行動は、情緒的な一面も否定は出来ないが、あくまで必然的なものであると思っている。というのは、日本人の一極性の行動は、日本語から来

るもので、日本語が存在する限り、一極性の行動はなくなならないからである。

日本人の一極性の行動は、あくまで日本語の「抽象的な指向」から来る日本人の一極性の思考法（具体的に細かく分かれるのを面倒くさがる思考法）が元である。人間は、言葉によって思考を行ない、思考によって行動するのが本筋である。勿論、思考の途中で、ある情緒に流れ、その情緒によって、最初のプロセスとは違う別の行動を、取るということもあり得るといことは、否定できないが、人間はあくまで、言葉によって物を考え、その考えによるプロセスによって、行動するのが本筋である。したがって、人間の行動の源はあくまで言語である。とすれば、日本人の行動の源は、日本語である。したがって、日本人の一極性の行動は、日本語が存在する限り、なくなるようなものではないと思う。

それから、日本人は個人の情緒を抑制して他人に合わせる特技を持っているので、一個人の情緒によって行動の流れを左右することは難しいと思うが、めん鶏のようなリーダーなら、それが可能であると思う。

確かに、十九世紀や二十世紀の前半においては、日本人が、アジア人の無気味に思う「情緒的な行動」を起こして、アジア人の一部が大変な目にあったが、二十一世紀に入れば、世界の無数の人が高度の知能を持つようになり、また、機械革命の時期とは違う、IT革命の時期に入れば、世界環境も多に変わるので、日本のリーダーもそう簡単に「情緒的な行動」を起こすことは出来ないだろう。

さて、日本人は無類の「新らし物好き」であるという点であるが、これは日本人の一極性の行動がもたらした結果であると思う。

日本人の一極性の行動は、人に強いられて取る行動ではなく、先ず言語の「抽象的な指向」があって、そこから一極的な日本人の思考法（具体的に細かく分かれるのを面倒くさがる思考法）が生まれ、今度はその思考法に

よって行動をするので、発想から行動までが自然な成り行きになり、皆が一人のように新しい物を得たがるようになる（或いは、皆が新しい物に取り組みたがるようになる）。しかし、誰かが、新指向、つまり、「新しい物に取り組み」という模範を示さないと、つまり、誰かがめん鶏のように先に行ってくれないとならない。誰かが新しい物を先に手に入れる（或いは、新しい物に先に取り組み）と、今度は皆が付いて行くようになる。つまり、誰かが新指向を示して、皆の内在の「思考法」を発動すると、今度は一極性の行動が発動されて、横並びになるというわけである。

そして、新指向を示す人が増えれば増えるほど、「新し物好き」の度合いも濃くなるわけである。

昔の日本の女性は、人を愛する場合にも「私はあなたを愛する」とは言わずに、「あなたに付いていく」といったのである。つまり日本人は、何かのきっかけがあれば、愛ではない場合でも、人によく「付いて行って」一極性になるが、付いていくきっかけは必要である。そしてそのきっかけが多ければ多いほど、「新し物好き」になるわけであるが、日本人はそのきっかけさえあれば、人に付いていくので、よその国の人より「新し物好き」になる。

日本人の一極性の行動の不気味さについては、多くを語るつもりはないが、日本は戦後の長い間、「個性を重視する」教育を行なってきた。ところが、その教育の副産物といおうか、多くの人がエゴになってしまって、手におえなくなって、日本のリーダー達が、頭を抱えている。これも、日本のリーダー達が、今はそう簡単に難をつれて、海を渡っていくことは出来ない要因の一つであると思う。

しかし、日本語が存在する限り、日本人の一極性の行動は消えないだろう。したがって、今のところはめん鶏が無茶なことをしないことを期待する他はないと思う。

IV. 教育から見た中国の文化と日本の文化

ここで言う教育は、中国の場合は広い意味の教育を指し、日本の場合は狭い意味の教育を指す。

さて中国では宗教を教育の一種であると見ている人がいるが、それについてはあまり議論は見られず、現代においては、ただ悪質な宗教と思われるものには政府が、人民に悪い影響を与える教育をするなどといって解散を命じたりしている。しかし、儒教が宗教であるかどうかについては意見が分かれる場合もあるようである。ところが、儒教が中国の社会に必要なものであるかどうかの問題となると、これは、古代から現在に至るまで、議論が絶えずに続いていると見る事が出来る。古代においては「韓非」の対抗、近代においては「五四運動」の時の「反孔家店運動」、最近においては「批林批孔運動」等が挙げられるが、現在においては儒教復活の傾向が見られる一方、批判的な目で見える人もなくはない。このように見てくると、儒教は二千五百年の間、一貫して中国人の心の奥に浸透していたとは、言えないのではないか、という疑問が残る。

しかし、漢代には儒教が国教として定着したことがあり、それ以後はいわゆる無知な農民までが、「三綱」、「五常」のくだりを口ずさむようになり、特に孟子の整理した五つの倫理関係は、つまり、「五倫」という家庭単位の差別政策は、中国全土の各家庭に、徹底的に浸透して、中国人の行動となって現われ、それが延々二千五百年も続いている。

このような儒教教育を教育と見た場合、教わる方が習った内容を、行動に移して実践しているかどうかという基準から判断すると、儒教教育の方が、遥かに現在の日本の国民的な義務教育を凌ぐことになる。

もともと孔子は、独創的なことを主張しようとは思わず、周代の伝統から出発して修身、

齊家、治国、平天下を達成することが目的で、その目的を達成するためには、先に仁の完成が必要であると思ったようである。その為に孔子は、人間と人間の関係、人間と自然の関係を強調したが、その後孟子が、人間と人間の間を、五種類に整理をして、五つの倫理関係、つまり「五倫」というようになったのである。

その五倫というのは他でもない、君臣関係、親子関係、夫婦関係、兄弟関係、朋友関係のことであるが、この関係は徹底した差別関係である。というのは、この五つの関係は、先ず女性を徹底的に無視する関係であるし、人間を不平等に扱う関係であるからである。

そのため儒教の根本は、差別道徳であると言われるようになったのである。もともと儒教は、人間と自然の関係の他は、人間社会の関係を打ち立てるつもりであったので、儒教という差別道徳は、社会の差別道徳でなければならないのに、結果的には家庭（宗族）内部の差別道徳になってしまったのである。

つまり儒教の差別道徳は、社会とは何の関わりもない、家庭（宗族）内部の差別道徳になってしまったのである。これについては、五倫を分析してみたらよく分かる。

先ず五倫の中の四つの関係、つまり、親子関係、夫婦関係、兄弟関係、朋友関係は、家庭の内部の関係であると見ることができる。というのは、親子関係、夫婦関係、兄弟関係は、言うまでもなく家庭関係であり、残りの朋友関係も、日本でいう家族ぐるみの付き合いという言葉通り家族とつながる、家族の域内の関係に入るからである。中国では、友人は家族の友人扱いをし、友人の友人は友人扱いをするのが普通である。このように五倫の五つの関係のうち、四つの関係が家庭内部の関係になるわけであるが、残りの君臣関係も、社会の普遍的な関係ではなく、国家機関上層部の関係と見ることができるので、結局儒教の差別道徳は、社会の普遍的な関係を無視し、

家庭内部の差別を強調した差別道徳であるということができる。

儒教の差別道徳というのは、社会において(実際は家庭において)人間一人一人に、その人相応の名前を与えて、その名称、名義、本分、義務などに相応する行動を取らせると、中国の社会秩序が立派に保てるということである。そのため、儒教のことを「名前の教」という人もある。

もともと儒教の道徳は家族範囲の差別から始まる差別の道徳であるが、家庭の一人一人は、祖父、祖母、父、母、息子というような名称を持ち、その名称に当たる本分を守り、その本分に当たる義務などを果たせば、その家庭はよい家庭になり、社会秩序も立派に保てるということである。ここの父、母、息子などは名称であり、家庭における人間関係でもあるが、これを見ても分かるように、儒教の価値観は、人間一人一人が、自分の分際を知り、自分の分際相応の行動を取れば、社会秩序は立派に保てるということにあると見ることができる。

しかし、儒教の倫理は、あまりにも家庭内部の人間関係、家庭における本分や義務などを強調しすぎたので、孔子の期待していた結果とは、丸反対の結果が現れて、歴史上たびたび「反孔家店運動」を引き起こされたりしている。

公子自身はあくまで人間それぞれが、自分の分際を知り、分際相応の行動を取りさえすれば、社会全体が安定し、社会の秩序維持は問題ないと思ったし、またそのようになるに違いないと推測したと思う。しかし、結果的には、中国人を社会性に乏しい、利己的で、社会の秩序を守らない人間に作り上げてしまい、社会には、「裙帯関係」(コネの関係)、贈賄、収賄などの腐敗現象が蔓延するようにさせてしまったのである。

このように、教育というものは教育者の意図するものとは反対に、予想外の結果になり

得ることがある。つまり、教育というものは、事前にある結果を期待して、それに合うプロセスを設定して、そのプロセス通りに実行しても、その教育を受けたものの全部、或いは一部が、初期の期待とは違う人間になってしまふことがある。つまり、教育というものは、初期の予想と違う結果になることがある。儒教の場合は、それを無視したといっても過言ではない。

では、儒教の場合、どんな結果が生まれたかを見てみよう。

先ず、儒教の五倫によって形成された、中国人の利己主義から見ていくことにする。儒教の五倫の五つの関係のうち、四つの関係までが、家庭に関する関係であることは、前述の通りであるが、それらの関係によって、儒教は長い間、中国人に、いわゆる分際相応の行動を強要してきた。例えば、息子には、先ず父母の生みの恩返しをしなければならないと強要し、親を尊敬し、親に孝行を尽くさなければならないと強要した。それから、祖先を崇拜し、家庭の名誉を守らなければならないことも強要した。そしてこれらの行動を、時の体制側からも、時には、宗教以上に強く強要されてきた。

このように強要されると息子はどうなるのか。例えば、息子が結婚の適齢期になって、親が、親の気に入る娘を見つけてきて、その娘と結婚しろと言ったら、息子は絶対結婚したくない相手であっても、結婚しなければならない。というのは、親の命令に従わないと、親不孝につながるからである。つまり、親が生きている間は、親に絶対服従しなければならない。いや、親が亡くなっても、三年以内には、たとえ科挙の試験があっても、受けてはならない。というのは、受けたら親不孝になるからである。

また、これは親が生きている間のことであるが、息子は、一生親許を離れて遠いところへ遊びに行ったり、旅行に出かけたりするこ

ともできない。というのは、孔子が中国の各家庭の息子達に、「父母在、不远游、游必有方」（父母が健在の時は、長期間の外遊は禁ずる。やむを得ず遠くへ行く場合は、行く先を明確にしなければならない）のようにしなければならないと、息子の分際に対応する行動として、決めてあるからである。

現に、今の中国ができる直前まで、多くの中国人は、特に無知な農民ほど、一生親許を離れずに親と一緒に、大家族を形成して暮らし、親がなくなった後も、親の墓を守りつづけたのである。

また、儒教の親孝行の決まりには、次のような事もある。親孝行をする息子は、「不爬高、不涉險」（高い所へ登っても行けないし、危険を冒してもならない）。

こんなにも、息子が、自分の一挙手、一投足を他人の意志によって決められると、現代人だったら反抗をするか、自殺をするか、なにかをしただろう。しかし、古い中国人は、反抗するところか、現代人には信じられないほど、冷静で、柔順で、忍耐力があって、勤勉で、大人しくて、精一杯息子の本分を守ったようである。一方、これは当然といえば当然なことであるが、孔子の予想を外れて、息子達が、気が小さく、独創性がなく、徹頭徹尾の利己主義で、社会秩序を守らない特徴を備えるようになったのである。

以上いくつかの、孔子の予想外の問題のうち、利己主義的で、社会秩序を守らないという点は、儒教の道徳には直接反するものである。その他にも、色々、中国人の弱点として現れる副産物があるが、それらについては回を改めて考察することにする。

そこで、ここでは、先ず中国人の利己主義を見てみることにする。中国人の利己主義発生の原因としては、先ず儒教に、家庭のメンバーが、自分の知らない社会人とは、どのように付き合えばいいのかについての明確な論述がないことが挙げられる。儒教では「良い

兄弟と、良い朋友（仲の良い友達）からなる国は良い国である」とは言っているが、家庭のメンバーが、自分とは全く知らない関係にある社会人とは、どのように付き合えばいいのかについては、詳細な理論的指導はない。このような状態で、一方的に家庭の四つの関係だけを強く強調されると、結果的には、家庭が、友人は入ってもいいが、知らない人は入ってはならない要塞のような物になってしまっ、家庭内部では孝行を尽くし、生死を共にし、命まで惜しまず捧げることができるが、家庭を一步でも出たら、知らない社会人ばかりなので、どのように付き合えばいいのか分からず、自然に、要塞の外の人と見なして、「敵対関係」を取ってしまう。

中国では現代の人でも、バスの中や、公の場所などで、よく知らない他人と喧嘩をするが、それは、他人を「敵対関係」に扱う具体的な例であると思えることができる。

このように、家庭と社会を要塞の城壁のように遮ってしまうと、人間の頭には家庭しかなく、すべてを家庭の為に捧げ、極端な家庭主義者、つまり広い意味の利己主義者になってしまう。結局、中国人の利己主義はこのようにして生まれたのである。したがって、中国人の利己主義の元凶は儒教である。これは孔子本人としては想像もつかなかったことであると思う。

中国人が極端な家庭主義者（広い意味の利己主義者）であることのもう一つの例を挙げよう。中国人は、今の現代人でも、友人のためなら、平気で「両肋挿刀」（どんな危険でも冒して尽くす）をするが、これは儒教の教えに従ったものである。つまり儒教の「五倫」の五つの関係のうち「朋友関係」に属する行為で、中国では、朋友の朋友は朋友なので朋友はもう家族そのものである。その朋友のためなら、社会に害を与えるぐらいは何でもないと思う。これが極端な家庭主義者（広い意味の利己主義者）である。

以上見てきたように、中国人は、儒教教育の思わぬ結果として、「極端な家庭主義者」、つまり、広い意味の利己主義者になってしまったが、これが、一朝一夕にして出来上がったものではなく、長い儒教教育に伴う副産物であるだけに、根強いものである。それがどれぐらい根強いものであるかは、次の事を見たらよく分かるだろう。

1949年10月1日に、今の中国ができたことは周知の通りである。その後の1958年に、中国では「人民公社」という行政区兼生産団体であるものを作って、土地など主な生産手段を集中して使う、集団生産を始めたが、その、土地を集中して農業を経営する人民公社が、後に、中国人の利己主義のために、解体されてしまったのである。

土地を集中して営農を行なうと、農民の家庭にとっては、土地などの生産手段が、自分の家庭の物ではなくなってしまう。すると利己主義的な農民は、生産意欲をなくしてしまって、田畑に下りてもあまり働かずに、油を売るようになる。こうして生産性は下がり、牛なども痩せこけてしまうので、指導側は慌ててしまって、一方では人民公社に不満なものを強く取り締まり、他方では、一つの具体的な対策として、「自留地」という極少量の土地を、各家庭に分けてやって、そこから取った農産物は、それぞれの家庭に所有するものと決め、その「自留地」で働く時間は、公の農地で働く時間外と決めた。すると今度は、公の農地で働く時は、油を売り、「自留地」で働く時は、夜が更けるのも忘れて働いて、公の農地には草がもうもうと生え、「自留地」には雑草一本ないありさまになって、管理者達が頭を抱えるようになった。そして秋になると今度は、公の農地の作物が、大量に盗まれるようになった。これでは人民公社は成り立たない、ついに人民公社は潰れてしまったのである。

人民公社が潰れて農地を農民に分けてやる

と、今度は世にも希な現象が起こった。人民公社が続く時は、全国の食糧危機が際限なく続いていたのが、一転して、食糧が有り余って、配給制がなくなるなどの奇跡が起こった。これは言うまでもなく、全中国の農地が「自留地」になったおかげである。このように、中国人の利己主義は、世にも希な奇跡を作り上げたのである。

以上見てきたように、中国人の利己主義は、人民公社を解体に追い込むほど、根強いものであるが、これが儒教教育の予想外の産物であるということは、孔子でさえ、予想も付かなかったことであろう。

さて、中国人の社会性に乏しい点であるが、儒教には、家庭内部に関する四つの関係や、よい兄弟やよい朋友からなる国はよい国であるという論述はあるが、家庭の友人より、比べ物にならないほど数の多い社会人（友人でない人）とは、どのように付き合えばよいかについては、これといった論述はなく、「社会性」という概念すらないぐらいである。今の中国ができる直前まで、中国には「社会奉仕」という言葉さえなかったようである。今の中国人でも、人間がなんでボランティアという行動に携わっているのか不思議でたまらない人が多いほどである。

このように社会性に乏しい中国人だから、家庭と社会を繋ぐ時は、先ず頭に浮かぶのは、孔子の教えの家庭に関する四つの関係であり、一番広い範囲を思い出した場合でも、少し家庭から触覚が出るぐらいの「朋友関係」だけである。したがって、中国人は、友人を含む家庭範囲内に属する集団内において、お互いに助け合い、相互扶助をするようになったが、家庭という要塞の壁は突き破ることができず、家庭内の相互扶助が定着して、家庭内の人を助けるためには、社会の法律も無視し、平気で社会の施設なども打ち壊して、それを売りさばいて家族の扶助に当てたりした。そんな事をしてても罪の意識があまりなく、もともと

旧中国には、国家による社会保障制度はなく、家族のために公の物に手を出しても、罪を感じるどころか、むしろ誇りにさえ思ったのである。

中国人が如何に社会生活が下手であるかを、つい最近の例で見てみることにする。何年か前に、中国の幾つかの都市に、相当数の電話ボックスを設置したが、それが後に、全部打ち壊されて、今は見張りを置く電話ボックスが設置されてある。こんな小さな例を見ても、中国人が社会性に乏しく、社会生活が下手であることがよく分かる。

しかし、これも儒教教育の予想外の結果である事には間違いない。

さて、教育から見た日本の文化であるが、日本は、古代には中国から多くの物を学び、近代においては西洋から多くの物を学んだが、その学び方に日本の文化が現れる。先ず古代の例を一つ見てみよう。古代、日本は中国から漢字を取り入れたが、その漢字を日本に持ってきてそのまま使ったわけではない。奈良時代の後期には、漢文を読む時には、日本独特の読み方である“返り点”というものを創案し、平安時代にはもう漢字から完全に脱皮した平仮名を作り上げた。この平仮名は、漢字から見たら、一種の飛躍である。しかし、表意文字から、表音文字という過程を考えると、一種の発明であると言わざるを得ない。この表音文字誕生の意義については後述することにする。

また、日本人は、漢字の偏旁冠脚、六書などの細かいところまで研究をして、日本の文化に合う、中国の漢字にはない、日本の国字を作り上げている。

このように、日本人は外国から学んだ物をそのまま使っているのではなく、それを完全に消化して、それ以上のものを作り上げるのが、特技である。

近代においては、外国から蒸気機関車を取り入れて、それを「アジア号」に変え、更に

は新幹線に変えてしまい、五年後には、リニアモーターカーに変えようとするが、ここにも、日本人は、習ったものをそのまま使わずに、それを完全に消化して、それ以上の物を作り上げる特技が見られる。

さて、日本は、西欧以外では一番先に近代化に成功した国である。そのため、清朝時代、中国も、大量の留学生を派遣して、日本を学んだが、日本の外国に学ぶそのような方法を取らなかったで、最初に期待したような成果はなかったようである。

では今はどうかと言うと、今も中国の方が期待しているほどの成果は、ないのではないかと思う。そこで、筆者は、留学生たる者は、先ず日本人の外国に学ぶ精神をしっかり学ばべきだと思う。

さて、日本は非西欧の世界では一番先に、近代化を実現したが、それはそれなりの原因が有ったはずである。その原因分析も、人によって違うと思うが、筆者が一番先に挙げたい原因が、日本人の外国に学ぶ精神(?)である。日本人は、その精神を発揮して、先ず中国から取り入れた漢字を、完全な日本人の物、つまり平仮名と片仮名に作り直した。もちろん日本人の物に作り直す過程は、時間的にも長く、特に、平仮名の場合は女性の手を経て、作り上げたが、その平仮名を、単純な、漢字の書き崩しであるとは見ることができない。というのは、平仮名は完全に漢字から脱皮した第一次の飛躍が有り、その次は、表意文字を表音文字に変えてしまった第二次の飛躍があるからである。

では、これらの平仮名と片仮名は、日本の近代化とは、どのような繋がりがあるのか。

日本が近代化をするためには、先ず貴族の子だけではなく、士農工商の子を共同に扱う教育をする必要があったが、つまり、今でいう大衆教育をする必要があったが、それを可能にしたのは、他でもない平仮名と片仮名である。つまり、平仮名と片仮名があったから、

近代化に必要な大衆教育ができたわけである。

文字を一部の人が独占するような漢字ではない、平仮名と片仮名、つまり、聞こえる音のように書ける、喋る音のように書ける、表音文字、これがあったから、近代化の前の江戸時代には、既に大衆教育を行なうことができたのである。

現に、江戸時代にはすでに、各藩には藩校が設立され、江戸や大阪などの各地には私塾が開かれ、農工商の子供向けの一般の寺小屋でも、読み、書き、算盤を教え、一大教育ブームのような雰囲気、醸し出されたのである。

このようにして、江戸時代後半期には、日本人の識字率は、男性で60%、女性で15%程度であったという。(ネット『世界日報』603による)

もし、当時の教育が漢字だけにたよる教育であったとすれば、どのように、なっただろう。中国の昔の教育のように、極少数の人しか字を知らなかったかも知らない。

もしそうであったとすれば、近代化直前の、大量の西洋の本の翻訳も、なかったかも知らないし、それらの本を読んでもくれる大衆もなかったかも知らない。もちろん、日本から逆輸入して現代用語として使っている、中国語もなかったはずである。

また、大衆教育がなかったら、日本の経済活動も活発でなかったし、外国の機械文明を日本に取り入れようとする国民意識も生まれなかったかも知らない。

日本の近代化は、教育によるものであるとは、誰でも簡単に言うことであるが、日本の国民意識を決定し、近代化に不可欠な日本人の一極性の行動の源である、日本の言語を日本流に表現できるようにした、日本の文化である平仮名と片仮名については、あまり論述がなく、これまでは影が薄かったようである。

以上のように、日本においては、平仮名と片仮名があったから大衆教育ができ、大衆教育があったから、近代化の準備を整える事が

でき、近代化の準備ができたから、非西欧国の中では一番先に、近代化に成功することができたのである。そして世界でも一番希な言語と言われる日本語も、高度の発展を遂げることができて、日本の文化を一層高度なものにすることが出来、他方では、日本中に、青木保氏の言う、「西欧的、近代的文化つまり、近代化や工業化を促す、第三番目の時間が流れるようになって、日本人が洋服を着るなど、生活様式の面でも大きな変化を遂げることができた。」

そして、この近代化の成功があったから、終戦当時日本が灰の山となっても、近代化に携わった人材を集めて、例の日本人の一極性の行動を存分に発揮して、最短の時間内に、今日の日本を作り上げることができたのである。

ところで、中国では一部の人が、1964年当時、日本のGNPと、中国のGNPがほぼ同じだったことを根拠に、「もし中国にプロ文革新がなかったら、今は日本と同じ裕福な国になっているはずだ」と言っているが、これはとんでもない誤解であると思う。たとえ中国にプロ文革新がなかったとしても、中国には平仮名と片仮名のような文字がない、したがって、極一部の人しか識字ができない。政府統計によれば、中国は今なお文盲が三億もいるとのことである。もう一つは、1964年前に中国は近代化を完成していない。したがって、人材がない。この二つの理由だけでも、そんな事を口にするのは恥ずかしいことであることが分かるだろう。

前述のようなことを言う人は、教育がどんなに大事なことであるかを知っているかどうか疑いたくなる。日本では昔から教育に力を入れ、戦後には100%に近い児童が、学校に入り、全国の範囲における国民的な義務教育を実施し、やがて大学の募集人数は入学適齢者より多くなるという。これは、誠に羨ましい限りである。

ところが、最近何人かの少年が、平気で人を殺すようになって、日本中が大騒ぎである。確かに、人を殺す経験をしたから人を殺すというのは、世界中何処に行っても通用するものではない。そこで、日本中が、教育の議論に熱中するようになったが、人々の主張は文字通り十人十色という気がする。しかし、少年犯罪が増える理由として、よく取り上げられる一つに、戦後から今までは、ただ勉強して、大きな会社に入って、偉くなるのが目標であったが、今のリストラで、その目標が崩れて、勉強する意欲が無くなってしまって、少年が非行に走るようになったという説がある。

しかし、これは、少年達の殺人の直接の原因ではないとおもう。少年達の殺人の原因は他にもない、極端な利己主義であると思う。

バスジャックの少年であろうと、一家殺傷の少年であろうと、「殺人体験達成者」の少年であろうと、皆、心内には、自分や自分のことしかなく、自分だけの欲望を達成するために他人を殺したのである。つまり極端な利己主義が彼らをそうさせたのである。元々、人間は無私の人を除けば、皆自分のためというものを思うようになる。しかし、日本人の場合、他人を気にし、他人を思いやり、先に他人に情けを掛けて、後で自分の利益を図るという日本の文化にしたがって、行動するのが普通である。ところが、前述の少年には、この日本の文化の欠けらも見当たらない。つまり徹底的な利己主義者である。

このような人は、自分の夢や目標が崩れたから、利己的になったのではなく、一言で言えば、自己コントロールが効かないから利己的になったのである。

人間は、誰しも、考えた事（或いは客体）が、100%自分の思うように行くとは限らない。だから、人間は、諦めも含めて自己コントロールが必要である。ところが、一部の人は、何かの原因で自己コントロールが効か

なくなる。

また、子供は親や学校が厳しすぎても自己コントロールが効かなくなることがあり、放任しすぎても自己コントロールが効かなくなることがある。学級崩壊が生じるのは、それが原因であるかも知らない。

また、日本の学校では、戦後ずっと個性を重視する教育を行ってきたが、その教育の予想外の結果として、生徒が立派な個性を持つことができず、利己的になってしまった可能性もあり得るということ、つまり学校の予期に反して、一部の生徒が、自己コントロールが効かなくなって、利己的になってしまったこともあり得るということ、を、そろそろ検討してみる必要もあるのではないかと思う。

V. おわりに

本論では、先ず中国語の具体的な指向と、日本語の抽象的な指向を考察し、それから、これらの指向によって形成される中国人の思考法と、日本人の思考法は、相反するものであることを考察した。そして、これらの相反する思考法を、筆者の論述上の一貫性を保つために、それぞれ「二極性の思考法」、「一極性の思考法」と仮定した。

中国人の「二極性の思考法」が成立する言語範囲を表現の形式によって分類すると、

A 「～ように～」のような形に翻訳できる文からなるもの。

B 「～是不是～」

「～動不動～」

「～形不形～」

この三種類の表現形式の文からなるもの。

C 二極或いは二極以上に分かれる用言の文からなるもの。

の三種類に分けられるが、事実上この三種類は、中国語の全域をカバーするものと見ることが出来る。したがって、中国語を母語とするものは、中国語のあらゆる表現を二極的

に捕らえる「二極性の発想」をする。そして、この「二極性の発想」からは、更に「二極性の行動」が生まれる。したがって、「二極性の発想」と「二極性の行動」は、中国語を母語とする民族全体の発想であり、行動であると見ることができる。

内山完造氏が、中国人の「二極性の発想」と「二極性の行動」に出会って、「それはインテリばかりではなくて、無知な農民までが同じである」と言ったことは、それを立証するものである。しかし、中国人自身は、「二極性の発想法」と、「二極性の行動」は、異文化に出会って、違和感を感じる場合か、或いは摩擦が起こったりした時に始めてそれに気が付くものである。

一方、日本語の「一極性の指向」からは、「一極性の思考法」が生まれるが、それが成立する範囲としては、

- A すべての用言文
- B 無限の省略文の範囲
- C 日本語は、「私はこれを買う」という文を、「私はこれだ」と言ったり、「今日は下調べをする」を、「今日は下調べです」と言ったりするが、このような言い方が成立する用言文と、体言文の範囲。

であるが、このA、B、Cの範囲も日本語の全域を含むと見ることができる。したがって、日本語を母語とする日本人は、日本語の全域において、日本語の「一極性の指向」から「一極性の発想」が生まれ、「一極性の発想」からは、更に「一極性の行動」が生まれる。

これについては、内山完造氏が「日本人はほうっておけば一辺倒になる民族である」と言っているが、これがそれを証明するものであると見ることができる。

また、日本人の場合も、自分の「一極性の発想」と「一極性の行動」は、異文化との出会いで、違和感を感じるか、或いは摩擦が起こったりした時に始めて感じるものである。

さて、中国語の「具体的な指向」から生まれる文化現象としては、中国人は心内の事を、具体的な事柄に託して表現する発想が生まれたこと、その発想が働いて、中国人は、天国を人間社会に喩えて扱ったこと、その結果中国人は天国に支配されて、支配者の思うがままの人間になったことを考察した。他方、日本語の「抽象的な指向」による文化現象としては、日本人の「一極性の発想」が生まれ、日本人の「一極性の発想」からは更に「一極性の行動」が生まれることを見た。そして、日本人の「一極性の行動」には、情緒的な一面があることにも触れた。それから、日本人の「一極性の行動」の危険性については、今の教育などを鑑みて、そう簡単に危険な行動に変わることはないことを指摘した。

教育から見た中国の文化においては、儒教教育が予期しなかった結果である、中国人の利己主義と中国人の社会性の乏しさの二点を中心に論を進めた。実は儒教教育が中国社会にもたらした予想外の結果というものは、数多く挙げられるが、本論ではその中重要なマイナスの面と思われるものだけを考察したのである。

また、儒教は漢代だけではなく、たびたび体制側に利用されてきたが、一旦体制側に利用されると、官吏達の非行のため、孔子や儒教がイメージダウンされてしまうこともある。例えば、これは筆者が経験した例であるが、筆者が曲阜の孔子廟を見に行った時、案内が気をきかせて、大成殿の柱に彫刻してある龍を指しながら、「これは当時の中国の決まりに違反するものです。当時は皇帝の宮殿の大殿以外の柱に龍を彫刻してはならなかったのです。」と言うと、筆者の横に立っていた人が「一介の田舎の教師が、皇帝と肩を並べたがる、本当に自分の分際を知らないな」と言っていた。百姓には、それほど身分相応の行動を強要しながら、官吏達は、皇帝をも欺いたりしていたのである。儒教の身分相応の行動

のマイナス面については、回を改めてもう少し詳しく考察したい。

さて、教育による日本の文化については、日本の外国に学ぶ精神と、非西欧国の中で一番先に近代化を実現することができた原因を考察し、日本の文化形成と日本の教育の近代化において、大きな役割を果たした平仮名と片仮名の発明の意義についても筆者の見解を述べた。

なお、蛇足ながら、最近の日本の学校教育に、教育者の予想外の結果として、マイナス面が発生する可能性のあることを指摘した。

[引用文献]

- 論語 1996 遼寧民族出版社
青木 保 H10 異文化理解への12章 日本放送出版協会
森三樹三郎 S63 中国文化と日本文化 人文書院
世界日報 2000 (ネット) 603

[参考文献]

- 林 語堂 1994 中国人(全訳本) 学林出版社
黒木雅子 1996 異文化論への招待 朱鷺書房
陳 舜臣 H10 日本的中国的 祥伝社
南 懷瑾 1990 論語別裁 復旦大学出版社
崔 春基 1999 北星論集(社) 36
崔 春基 2000 北星論集(社) 37
笠井昌昭 1997 日本の文化 べりかん社